様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 ２９ 日現在

機関番号：１２６０３
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2017～2020
課題番号：１７Ｈ０２３９８

研究課題名（和文）イスラーム圏における簿記史料の通時的・共時的研究

研究課題名（英文）A Diachronic and Synchronic Study of Historical Bookkeeping Materials in the Muslim World

研究代表者
高松　洋一（Takamatsu, Yoichi）

東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・教授

研究者番号：９０３７６８２２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　12,400,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は、13-14世紀にイラン高原で成立したと考えられるイラン式簿記術が、その後各地でどのように展開していったかという問題に関し、サファヴィー朝とオスマン朝の簿記史料を用いて通時的、共時的に検討した。
　具体的にはこれまで研究されてこなかったサファヴィー朝シャー・タフマースプ時代に著されたギヤース・アッディーン・アブー・イスハーク・ケルマーニーの『簿記術論説』を分析し、イランにおいて簿記術が発展したことを明らかにした。またオスマン朝の宮廷や財務長官府で作成された帳簿資料の多くの実例を検討し、イラン式簿記術がオスマン朝で多様な独自の発展を遂げていたことを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　15世紀にイタリアで体系化された複式簿記が世界標準となる近代以前においては、世界各地で独自の簿記術が発達していた。中でもモンゴル支配下の13-14世紀のイランで複数の指南書が現れたイラン式簿記術は、近世イスラーム帝国の発展にともなって東はインド亜大陸から西はオスマン朝支配下の東南ヨーロッパまでに拡大し、広大な簿記文化圏を形成していた。
　本研究は16世紀以降も発祥のイランで簿記術指南書が著されて進化を遂げていたこと、同時代のオスマン朝統治下では、イランの簿記術指南書が想定しているよりもはるかに多様な簿記の実践が行われていたことを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：　This research examines how the Iranian bookkeeping system, which is thought to have been established in the Iranian plateau in the 13th-14th centuries, developed thereafter, using historical sources of bookkeeping from the Safavid and Ottoman dynasties.
　Specifically, analyzing Ghiyath al-Din Abu Ishaq Kermani's "Bookkeeping Treatise" written during the Shah Tahmasp era, which has not been studied until, it is clarified how bookkeeping developed in Safavid Iran.　In addition, by examining many examples of account books prepared by the Ottoman court and the Office of the Minister of Finance, the various own developments of Iranian bookkeeping in the Ottoman dynasty are revealed.

研究分野：歴史学

キーワード：イスラーム史　簿記術　史料研究　中東　オスマン朝　サファヴィー朝

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

（１）研究代表者はこれまでオスマン朝(1299-1922 年)のアーカイブズ史料を研究してきたが、文書に関しては古文書学的研究が相当蓄積されているのに対し、帳簿については、史料として体系的な分析がほとんどなされないまま数値のみが利用されている現状に疑問を抱いていた。さらに当時の社会で用いられていた簿記術の研究が、、帳簿を正確に理解するための喫緊の課題であると痛感するようになった。またオスマン朝の帳簿に用いられている術語の多くがペルシア語由来であり、オスマン朝の帳簿には、イランさらにはイスラーム化以降のインドで作成された帳簿と様式の類似が見られることから、19 世紀に複式簿記が西欧から受容されるまでは、東はインドからイランを経て、西はオスマン朝支配下のアナトリアからアラブ地域さらにバルカン地域にまたがる広大な地域で、イラン起源の簿記術が標準となっていたと考えるに至った。

（２）このような時代も地域も広がりのある簿記術を十全に研究するためには、オスマン朝史のみならずイラン史の専門家も参画して、「イラン式簿記術」についての共同研究を行うことが必要であると研究代表者は認識した。そこで「イスラーム圏におけるイラン式簿記術の展開:オスマン朝治下において作成された帳簿群を中心として」（人間文化研究機構公募研究、平成 20 年度～24 年度)、「イスラーム圏におけるイラン式簿記術の成立と展開」(科研費基盤研究(B)、平成 25 年度～28 年度)の二つの共同研究を組織し、14 世紀イランの簿記術指南書『簿記術に関するファラーキーヤの論説』の日本語訳注など「イラン式簿記術」に関する研究成果を発表してきた。本研究はこれらの共同研究を深化・発展させることを意図したものである。

２．研究の目的

（１）上記の簿記術指南書『簿記術に関するファラーキーヤの論説』をはじめ、複数の簿記術指南書が執筆された 13~14 世紀のイル・ハン朝下の「イラン式簿記術」についてはある程度の知見が得られてきたが、その後の時代に「イラン式簿記術」がいかなる形で発展、継承されていったかは必ずしも明らかにされていない。ペルシア語で「スィヤーク」と呼ばれる「イラン式簿記術」が、発祥のイラン高原の地において 15 世紀以降とりわけサファヴィー期に、どのような変化を遂げたのか、という問題を通時的視点に立って解明することが、本研究の第一の目的である。

（２）その一方で、イランを離れた地において「イラン式簿記術」がどのように受容され、またいかに発展していたかという問題についても、全く手付かずのままである。幸いにしてオスマン朝のアーカイブズ史料には、様々な形態・様式で膨大な分量の帳簿が残されている。「イラン式簿記術」が統治技術の一つとしてオスマン朝によってイランの先行イスラーム諸王朝から受容された上で、それがオスマン朝の制度や社会構造に合わせ、どのような独自の変容を遂げたかという問題を、イランにおける簿記術のあり方と共時的に対照しつつ解明することが、本研究の第二の目的である。

３．研究の方法

（１）サファヴィー期の簿記術のあり方を検討するために、ギヤース・アッディーン・アブー・イスハーク・ケルマーニー(Ghiyāth al-Dīn Abū Isḥāq Kirmānī)によってサファヴィー朝初期のシャー・タフマースプ時代（1524-1576 年）に著された『簿記術論説（*Risāla*）』の未公刊写本を共同研究会の形で講読し、ペルシア語テキストの校訂及び日本語訳注を作成する。簿記術の総説にあたる序論部分については、これまで共同研究で作業をあらまし終えているため、本研究では著者が簿記の実例を紹介している『簿記術論説』の本論を中心に取り扱う。その上で『簿記術に関するファラーキーヤの論説』等、13~14 世紀に執筆された簿記術指南書との比較を行う。

あわせて本著作に関しては、これまで十分に研究されてこなかったため、写本系統や善本の特定がなされていないため、共同研究のメンバーをイランに派遣して写本の収集に努める。

（２）オスマン朝下では独自に執筆された簿記術指南書の存在がこれまで知られていないため、イスタンブルのスレイマニイェ図書館等で写本の調査を行う。

その一方で、イスタンブルのオスマン文書館では帳簿の実例が多数残されていることから、現地調査を行なって簿記術の応用実例として様々な帳簿史料をできうる限り収集する。とりわけこれまで閲覧許可取得が極めて困難であった、トプカプ宮殿博物館所蔵のアーカイブズ史料がオスマン文書館に移管され、デジタル画像として利用できるようになったため、宮廷財政に関する帳簿史料の収集に努める。

その上で収集されたオスマン朝の帳簿群と、『簿記術に関するファラーキーヤの論説』や『簿記術論説』をはじめとするイランで成立したペルシア語簿記術指南書の記述内容との対照を行う。

４．研究成果

（１）ギヤース・アッディーン・アブー・イスハーク・ケルマーニー『簿記術論説』本論のペルシア語テキスト校訂および日本語訳注作成

およそ毎月１回(1 年間で計８回)の頻度で研究会を開催し、上記『簿記術論説』写本の本論部分の講読を行なった。本論第１部で取り上げられる日誌(rūznāmcha)、第２部で取り上げるタウジーフ帳簿(tawjīh)、第 3 部で取り上げるアワールジャ帳簿(awārja)の実例全てのペルシア語テキストの仮校訂を終え、日本語訳注を作成した。とりわけ税務担当者が責任を持つ規定納付額の納付状況や、財務各部局の支給額と消化状況を記録する貸し借り対照表の機能を有したアワールジャ帳簿については、記述の分量も多いこともあり、時間をかけて分析を行なった。先行する簿記術指南書がより多くの帳簿の類型を解説する一方で、キルマーニーがタウジーフ帳簿およびとりわけアワールジャ帳簿に紙幅を割き、様々な物品の実例を取り上げていることは、サファヴィー朝下の財務会計制度の変化に対応して、これらの帳簿類型が発達したことをうかがわせるものである。また簿記術用語についても、先行する簿記術指南書に比してペルシア語語彙がより多用されるようになったことが認められた。

また算術を解説した第４部を除く本論を一通り通読した結果、以前の研究会で判読できなかったアラビア文字による物品名、単位などが多数判明したため、難読箇所の再読・訂正を行い、校訂および訳注をより完全な形にすることができた。

またペルシア語テキスト校訂および日本語訳注作成にはイランのゴム市にあるマルアシー図書館所蔵の写本を原則底本としてきたが、テヘランのマジュレス図書館(2 写本)、アースターネ・ゴッズ図書館所蔵の１写本、計 4 写本の比較検討を通じ、写本系統の点でテキストの古態を伝える部分のあるアースターネ・ゴッズ図書館所写本に独自の価値を認めるべきことも明らかになった。

（２）シンポジウム、セミナー、研究会の開催

研究成果を広く学会に還元するために、九州大学文学部九州史学会との共催により、2019 年度九州史学会大会の<イスラム文明学部会>（2 月 15 日）において「「イラン式簿記術」とスィヤークの世界」と題するシンポジウムを開催した。研究代表者、分担者、連携研究者、研究協力者、研究会参加者からなる計 5 名による発表を行なった。各発表者と発表題目は以下の通り。

髙松洋一（研究代表者）　「趣旨説明―イラン式簿記術とスィヤークの世界―」

渡部良子（研究協力者）　「史料としてのペルシア語簿記術指南書―13-14 世紀指南書に見るイルハン朝の宮廷財政」

近藤信彰（研究分担者）　「イラン式簿記術 ―サファヴィー朝期の応用例」

阿部尚史（連携研究者）　「 財産目録・帳簿史料に見る家産の維持・存続―19 世紀後半におけるイラン有力者家族の実践」

大塚修（研究会参加者）　「 ペルシア語文化圏における普遍史の変貌と簿記術」。

また、若手研究者の育成を意図して、アジア・アフリカ言語文化研究所において、大学院生を主な対象として 2 回のオスマン文書セミナーを開催し（2019 年、2020 年）、オスマン朝で簿記に特化したスィヤーカト書体を含む財務文書と帳簿の講読を行なった。また同研究所において共同利用・共同研究課題『オスマン文書史料の基礎的研究』との共催で、報告者としてアンカラのビルケント大学研究員（当時）の岩本佳子氏を、コメンテーターとして連携研究者の熊倉和歌子氏を招聘して、「租税調査台帳 Tahrir Defteri はいつ消滅したのか：オスマン朝における租税調査台帳の発展と衰退の研究」という研究会を開催し、オスマン朝とマムルーク朝の帳簿の比較研究を行なった。

（３）オスマン朝の宮廷財政帳簿の分析

これまでの簿記術指南書の講読を通して得られた知見を、今日伝世しているオスマン朝の帳簿史料の解読に応用することを試みるため、18 世紀オスマン朝の宮廷財産の出納簿、政府高官の没収財産記録簿、王族による寄進によって設立された図書館のワクフ会計および職員の俸給簿を取り上げ、簿記術の観点からこれらの分析を行った。トルコ共和国のイスタンブルにある国立アーカイブズ庁オスマン文書館で調査を行い、欠損時期のないマフムト１世時代（1730―54）の宮廷財産の収支簿を 25 年間分収集し、月ごとの収支の計上の仕方、何をもって収入または支出と見なすかを分析した。またこれらを没収財産記録簿と対照することにより、解任あるいは処刑されたり、死亡した政府高官の没収財産が、現物として宮廷内の財宝庫に接収されたり、市場で売却されて換金されて上で現金として納めらたりして、いかに宮廷財産に計上されているかも明らかにした。

またマフムト１世がアヤソフィヤ図書館に寄進した財源から上がる膨大な収益から、オスマン朝の財政を担った行政機構である財務長官府の再建費用をまかなった事実を突き止め、国家財政とは一見無関係に思える図書館のワクフ会計から、財務長官府の建築で用いられた資材や、

建物の各部局の間取りを知ることができ、18 世紀オスマン朝における財務行政機構の具体像が明らかにできることを解明した。

18 世紀のオスマン朝の帳簿が「イラン式簿記術」の原理に基づいて作成されていたことは疑いの余地はなく、むしろイランの簿記術指南書に見られる以上に、ペルシア語語彙の使用頻度が高いことが目を引いた。しかしながらオスマン朝で簿記術は、簿記指南書からよりも、見習いの書紀たちによって実地で学ばれたであろうことが、簿記の練習をした痕跡が残る複数の写本の存在から明らかになった。またオスマン朝でも「日誌」の存在は確認できるものの、サファヴィー朝で重視されていた「タウジーフ帳簿」や「アワールジャ帳簿」が導入された痕跡は認められず、『簿記術に関するファラーキーヤの論説』で「梯子段方式」と呼ばれる簡便な記法が独自の発展していた状況が見られた。かくして簿記術指南書からうかがわれる簿記術の理論が、実地にどのように適用され、またこれらの知見をもとに帳簿史料がいかに正確に解読できるかを、具体的な実例を踏まえて明らかにすることができた。

<引用文献>、渡部良子、阿部尚史、16 世紀サファヴィー朝期のペルシア語財務・簿記術指南書 ：ギヤースッディーン・キルマーニーの簿記術論文・序章簿記術論校訂・日本語訳注、 アジア・アフリカ言語文化研究、94 号、2017、383-485

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計6件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 Yoichi Takamatsu	４．巻 -
２．論文標題 I. Mahmud doneminde Ayasofya Kutuphanesi ve Koleksiyonu	５．発行年 2020年
３．雑誌名 Golgelenen Sultan, Unutulan Yillar: I. Mahmud ve Donemi (1730-1754) haz. Hatice Aynur, Istanbul, Dergah	６．最初と最後の頁 158-206
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Nobuaki Kondo	４．巻 12
２．論文標題 How to Found a New Dynasty: The Early Qajars' Quest for Legitimacy	５．発行年 2019年
３．雑誌名 Journal of Persianate Studies	６．最初と最後の頁 261-287
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1163/18747167-12341336	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 近藤信彰	４．巻 826
２．論文標題 アジアにおける『ハムザ物語』――イスラーム、ペルシア語、フロンティア	５．発行年 2019年
３．雑誌名 歴史評論	６．最初と最後の頁 5-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Yoichi Takamatsu	４．巻 51
２．論文標題 Osmanli Belge Yonetiminde Kesilmis Hatt-i Humayunlar	５．発行年 2019年
３．雑誌名 Osmanli Arastirmalari / The Journal of Ottoman Studies	６．最初と最後の頁 115-157
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.29135/std.986962	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 高松洋一	4．巻 980
2．論文標題 トルコ・イスタンブル・(旧)首相府オスマン文書館(大統領府オスマン文書館	5．発行年 2019年
3．雑誌名 歴史学研究	6．最初と最後の頁 38-42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 高松洋一	4．巻 なし
2．論文標題 一八世紀オスマン帝国における紅海交易の一断面ー問答集『ジッダ港の統治の秩序のために準備された諸留意点』	5．発行年 2017年
3．雑誌名 商業と異文化の接触：中世後期から近代におけるヨーロッパ国際商業の生成と展開	6．最初と最後の頁 714-749
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計20件（うち招待講演　8件／うち国際学会　13件）

1．発表者名 高松洋一
2．発表標題 趣旨説明 ：「イラン式簿記術」とスィヤークの世界
3．学会等名 2019年度九州史学会
4．発表年 2019年

1．発表者名 高松洋一
2．発表標題 マフムト 1 世治下（1730-1754）の「アヤソフィヤ図書館」の設立と運営について
3．学会等名 全所プロジェクト「アジア ・アフリカの現代的諸問題の解決に向けた新たな連携研究体制の構築」（招待講演）
4．発表年 2019年

１．発表者名 近藤信彰
２．発表標題 イラン式簿記術――サファヴィー朝期の応用例，シンポジウム「イラン式簿記術」とスィヤークの世界
３．学会等名 2019年度九州史学会
４．発表年 2019年

１．発表者名 Nobuaki Kondo
２．発表標題 Motaleat-e tarikh-e Iran dar zhapon: ketabha-ye tahqiqi, Barrasi-e Chaleshha-ye Iranshenasan-e Zhaponi
３．学会等名 Japanse studies on Iranian History: Monographs and books, Discussing Problems of Japanese Iranologists, International conference, Oral Presentation(guest/special)（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 近藤信彰
２．発表標題 中東における世界遺産――その問題点
３．学会等名 世界遺産研究会（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Nobuaki Kondo
２．発表標題 A Turko-Mongol Tradition: Bahadur Khan as a title of Sovereigns in West and Central Asia
３．学会等名 Special Lecture, Fudan University（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Nobuaki Kondo
２．発表標題 Iranshenasi dar Zhapon, Sokhanrani dar Daneshgah-e motaleat-e khareji-e Shanghai
３．学会等名 Persian Department, Shanghai International University（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Nobuaki Kondo
２．発表標題 From Prophet’s Companion to the Monotheist Romance Hero: The Hamza-nama in the Global Context
３．学会等名 Consortium for Asian and African Studies (CAAS) the 10th Symposium “Cultural Expression in the Era of Globalization（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Nobuaki Kondo
２．発表標題 Pishqadaman-e Iranshenasi dar Zhapon
３．学会等名 Sokhanrani dar Daneshgah-e Kashan（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 近藤信彰
２．発表標題 ガージャール朝『王室財産・ワクフ財台帳』の再検討
３．学会等名 日本中東学会第35回年次大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 Nobuaki Kondo
２．発表標題 'Ilm al-siyaq and Mostowfis in Early Modern Iran
３．学会等名 All-Japan-Exeter Joint Workshop. “Knowledge as Power: Production, Control, and Manipulation of Knowledge in Muslim Societies"（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Nobuaki Kondo
２．発表標題 "Ahamiyat-e noskhe-e badal dar tashih-e matn: tajrobe-e tashih-e Dastur al-Moluk dast-afzari-e bara-ye tashkilat-e divani-e dowre-e safaviye"
３．学会等名 International conference Nasakh-e khatti-e farsi be-masabe-e miras-e jahani. Institute for Humanities and Cultural studies（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Nobuaki Kondo
２．発表標題 "Pishine-e tahqiq bar Dastur al-Moluk"
３．学会等名 Special Lecture, Academy of Persian Language and Literature, Iran（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 高松洋一
２．発表標題 オスマン文書史料研究の現状と課題
３．学会等名 「オスマン文書史料の基礎的研究」2017年度第1回研究会
４．発表年 2017年

１．発表者名 高松洋一
２．発表標題 アラビア文字紀年銘クロノグラム
３．学会等名 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所情報資源利用研究センター(IRC)創立20周年シンポジム
４．発表年 2017年

１．発表者名 Nobuaki Kondo
２．発表標題 Islamic Law and Society in Iran: A Social History of Qajar Tehran
３．学会等名 Royal Asiatic Society: Book Lounch（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 近藤信彰
２．発表標題 サファヴィー朝イラン法廷制度再考
３．学会等名 日本中東学会第33回年次大会
４．発表年 2017年

１．発表者名 Nobuaki Kondo
２．発表標題 Islamic Law and Qajar Society
３．学会等名 Iranian Studies Initiative at NYU（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 Nobuaki Kondo
２．発表標題 Persian Document Workshop
３．学会等名 Iranian Studies Initiative at NYU（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 Nobuaki Kondo
２．発表標題 The Early Qajar Form of Political Authority
３．学会等名 8th Biennial Convention, The Association for the Study of Persianate Societies（国際学会）
４．発表年 2018年

〔図書〕　計2件

１．著者名 Nobuaki Kondo ed. Mirza; Mohammad Rafi Ansari	４．発行年 2018年
２．出版社 Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa	５．総ページ数 362
３．書名 Dastur al-Moluk: A Complete Edition of the Manual of Safavid Administration	

１．著者名 Nobuaki Kondo	４．発行年 2017年
２．出版社 Routlege	５．総ページ数 196
３．書名 Islamic Law and Society in Iran: A Social History of Qajar Tehran	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	近藤　信彰 (Kondo Nobuaki) (90274993)	東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・教授 (12603)	

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	渡部　良子 (Watabe Ryoko)		
連携研究者	齋藤　久美子 (Saito Kumiko) (90432046)	聖心女子大学・現代教養学部史学科・准教授 (32631)	
連携研究者	阿部　尚史 (Abe Naofmi) (20589626)	お茶の水女子大学・基幹研究院 人文科学系．文教育学部 グローバル文化学環・准教授 (12611)	
連携研究者	熊倉　和歌子 (Kumakura Wakako) (80613570)	慶應義塾大学・経済学部・教授 (32612)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関